

中動態としてのボランティア通訳
コミュニケーション

—スポーツと翻訳・通訳・異文化コミュニケーション
の視点からみえる真のグローバル人材—

小坂貴志

Volunteer Interpreter Communication as a
“Middle Voice”: Global Human Resources
from the Perspective of the Academic Fields
of Sports, Translation / Interpretation and
Intercultural Communication

Takashi KOSAKA

This article discusses what the author learned from his own experiences as a lecturer at an interpreter volunteer training seminar sponsored by Kanda University of International Studies and later by the Consortium of Foreign Studies in Japan. In each of the fields of sports, translation / interpretation, and intercultural communication, there are many scenarios that needed to be conceptualized and implemented without waiting for the theoretical knowledge that could be obtained from research. This was necessitated by the urgent need to train sports volunteer interpreters in time for the Tokyo Olympics and Paralympic Games to be held in 2020. In a similar vein, there is also the task of exploring the meaning of global human resources, a topic attracting ongoing attention from communication research due to its ever-expanding conceptualization in the age of globalization. In order to confront these challenges, sports volunteer interpreters could be considered an ideal role, reflecting genuinely global human resources informed by the experiences of participants and lecturers. One issue, as a result, is how classrooms have become an indispensable educational space to promote industry-university collaboration. Nowadays, students often work on practical projects in classrooms that afford them opportunities to meet external

guests from business fields. Finally, the author sounds a note of caution regarding project-based learning when applying actual business projects to classes, and notes the need for volunteer leadership education to enhance the training of sports volunteer interpreters.

キーワード：異文化コミュニケーション、翻訳・通訳、スポーツ、スポーツ通訳ボランティア、グローバル人材

はじめに

本稿は、神田外語大学(後に、全国外大連携)主催の通訳ボランティア育成セミナーに講師として参加してきた筆者が、その経験を踏まえてまとめたパーソナルな視点からのエッセイである。スポーツ、翻訳・通訳、異文化コミュニケーションなど各分野において、その分野の性格上、調査研究結果から得られるテオリアの知見を待たずとも、先行的に実践に移さざるを得なかった場面が多々あげられる¹⁾。その典型例として、2020年開催予定の東京オリンピック・パラリンピックに向け、スポーツ通訳ボランティア育成が喫緊の課題となっている状況がある。また、コミュニケーション研究でも関心を集めており、いまだに極めて曖昧な概念となっているグローバル人材とは何かを論ずる課題もある²⁾。本稿では、これらの課題に立ち向かうべく、極力理論的な議論は避け、受講生・講師の経験に基づくエッセイ形態でスポーツ通訳ボランティアのプラクシス(理論と実践の融合)の考察を進めていく。育成上の課題の一つとして、高等教育機関である大学が産学連携のために育成の場を提供するには、授業は欠かせない教育空間となる。スポーツ通訳育成をはじめ、授業へ実プロジェクトを応用する際の注意点を最後にまとめる。

1. グローバル人材と発想の転換

“Think globally, act locally.”

言い尽くされた金言ではあるものの、グローバル社会に求められ、異文

化コミュニケーションや翻訳・通訳のみならず、ボランティア精神を的確に言い表した表現ではないだろうか。元々は、アメリカ発の社会起業家育成のための大学生向けビジネスコンテスト SIFE³⁾ で用いられていた際に筆者が知るに至ったのだが、その後、この言葉が多くの場面で引用される場に直面してきた。引用される際には、その出典すら表記されないことが多々あったので、一体誰の言葉なのかすら振り返られる機会が少ないのが事実である。真の金言、格言とはこのような言葉を指しているのだろう。

素直に訳せば、「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」となる。この金言を解釈するに当たって、文章を2つに分けて考えることができるので、その区切りを利用して3通りの解釈を思いついた⁴⁾。物事は世界規模で考えよ、とする、初めの節に意味上の力点を置くものが1つ、身近なところで行動せよ、との後の節を強調するものが2つ。そして、ここが最大のポイントなのだが、世界規模で考えることと身近なところから行動をはじめるとは実は関連し合っているのだという3つめの解釈である。

1つめの解釈に従い、世界規模でいきなり行動しようとしても、誰もが途方に暮れてしまうだろう。また、2つめの解釈によって、身近なところで地味に行動していても、自分は一体何をしているのだろうとの焦りが募ってくるはずだ。そこで、第3の解釈である、塵も積もれば山となる、千里の道も一歩から、などの発想で、自分が今やっていることは紛れもなく、世界規模での貢献を果たしているのだとの関係性を認識すれば、たった1人の人間の努力なのだが、何らかの形で世界へ貢献しているとの確信を抱くことができるようになる。この確信さえ抱くことができれば、世界のことを常に念頭に置きつつも、自分の身近なところでちょっとした行動をはじめることができる。発想の転換と言ってしまうえば、なんだそんなことか、と首を垂れてしまわれるかもしれないが、発想の転換こそ、グローバル化の第一歩だと筆者はこの金言に教えられた。

2. 発想の転換のためのスポーツ通訳ボランティア

Think globally, act locally. を実践に移すための手段として具体的に何が考えられるだろうか。本特集で話題にしている、ボランティア、翻訳・通

訳、スポーツが最高の舞台を用意してくれる。というのも、それぞれが自己(自発性)と他者性を際立たせてくれるコミュニケーション行為を可能にするものであるからだ。つまり、これらを総じて別の言葉で異文化コミュニケーションとなり、文法の世界でいう「中動態」が的確にそのコミュニケーション行為を形容してくれる⁵⁾。

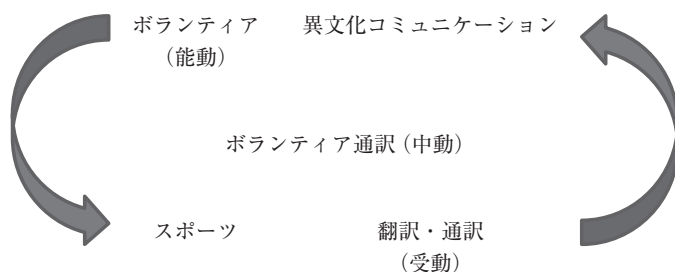
ボランティアは、他者のための行為であり、極めて身近なところで相手に尽くそうとする点において、act locally が求められ、そこからスタートし、経験を積むことで think globally へとつながっていく。スポーツとは、文系理系の区別を超えた、一般学生にとってみれば、そして外国語学部の単科大学である神田外語大学生にとってみても、もっとも遠い存在となり得、語学とスポーツとは、「語学はスポーツである」との比喩こそ存在するのだが、概念的に互いに結びつかない遠い存在として広く認識されている。自らをスポーツというもっとも遠い世界に置くことで、擬似的に global な世界を体験することができる。その場に、翻訳・通訳でなければ交通ができない場面が想定されれば、発想だけではなく、実践そのものが異言語使用者同士を結び付けるための異文化コミュニケーションが実現される。ボランティアという local な実践は、スポーツという自らの立場からはかなり遠いところにある global な発想を可能にしてくれる。異文化コミュニケーションとしての翻訳・通訳という実践を通して、その global な発想を知ることができる。

自発性の高い行為が期待されるボランティアに対して、あくまで他者の発言が自らの行為の契機となる通訳行為は受け身的な対応が期待される。前者を能動、後者を受動とも言い換え、能動のボランティアと受動の通訳を合体させボランティア通訳を、文法の世界で表現し直せば、「中動態」なる概念と結びつけられる⁶⁾。これまでの議論を踏まえて、ボランティア、スポーツ、翻訳・通訳、そして異文化コミュニケーションの関係性をサイクリックに表すことができる(図1)。

よく知られた英語表現に volunteer to があり、この場合の volunteer は、一般的に理解される「無償」とはかけ離れた意味であるところの「自発的に～する、自主的に～する」⁷⁾となる。ボランティアとは、参加する者

中動態としてのボランティア通訳コミュニケーション

図1 サイクリックな関係性



の自由意志による自発的活動を意味している。無償による奉仕ととられがちで、この点だけが強調されることがあるが、むしろ有償か無償かの違いは二次的な基準であって、参加者の自主性や自発性が強く求められている。

大学教育の中でも、求められる学生像として自律性、自発性、自主性を有する人材があげられ、このことから、大学教育でボランティア活動や、基本的にボランティア活動に位置付けられるインターン活動などが盛んになってきている。自らがいかに社会に貢献しているかといった社会的存在意義との関係からも、自らの力で解答を探することができる理想の機会となるだろう。

ボランティア活動としての異文化コミュニケーションの場

ボランティア活動の場は、災害発生時の緊急支援活動、外国人観光客へのおもてなし活動、身体・精神などの面で支援を必要とする方々への活動などに大別して考えることができる。2011年に発生した東日本大震災をはじめとする災害時には、時間の経過にしたがって求められるボランティア活動の内容の変化が報告された。災害発生時直後は、物資の収集や運搬、配給、生存者の確認、がれきの撤去などの様々な活動が必要となったが、時が経つにつれ、被災者への精神的支援といった新たな側面からの支援が求められるようになった。当初から専門家による指導を基にしたボラン

ティア活動の運営が求められるが、実際には、災害がいつ、どこで、どのような形で被害をもたらすかなどは予測がつかないため、災害が起こるたびに、使用可能な資源を用いて、考えられる手段でボランティア活動が組織化されていく。効果的な活動にするには、専門的な知識に裏付けられているか、専門家の指導のもとボランティア活動が運営、実施されることが必要であろう。

本特集が関心を寄せているのは、外国人観光客へのおもてなし活動の一環としてのアスリートへのボランティア通訳活動の支援である。ボランティア活動が求められる場の観点から、アスリートらへのボランティア活動の支援とで質的に異なる点は、上記のケースでは、ボランティア活動を受ける人々が生存していく上でボランティア活動そのものを必要としているのに対して、アスリートらは、それぞれが競技に参加することへの支援はほぼ必要としていないことにある。100 m 短距離走者は、競技に参加するためにボランティア活動を特に必要としない。ラグビーのワールドカップへ参加する選手は、ラグビーの競技をする上で、本特集で考察している、いわば大学生からの(素人)通訳サービスを必要としない。もちろん、各クラブの監督が選手とは違った母語を話す、審判員が通訳サービスを必要とするといった特殊なケースはあるが、試合の実施そのものに影響を与えるような通訳サービスは、あらかじめプロの通訳者が通訳をしなければならぬ。

一方、競技に参加するまでには、幾多の事前準備事項があり、競技に参加している会期中にも様々な競技以外の活動があり、2020年の東京オリンピック・パラリンピックなどは言わずもがな、世界レベルでのスポーツ競技の振興が進む中、本特集で扱っている通訳ボランティアの需要は年々高まりつつある。通訳ボランティアに参加する上で、まずは、一般的なボランティア活動との違いに注意する必要があるだろう。

また、さらなる違いとして、通訳というサービス内容に対する認識の違いもある。通訳と言えば、発話者の言葉を、その言葉を理解しない人たちのために、別の言葉に変換する作業をイメージするだろうが、果たして、こういった作業イメージのどの程度が実際に求められる、あるいは求めら

れた作業と乖離しているのかについても検証の余地がある。筆者の経験を踏まえて考えると、単なる言葉の移し替えでは済まない、別の観点からすると、内容的には難しかったり、その逆に簡単だったりと云った様々なボランティア活動内容が参加者に求められているのではないか。これが本論で解き明かしたい設問の1つである。

本論を先に進める前に、ここで暫定的な結論を述べておくと、通訳ボランティアを通訳という限られた内容だけに留めるのならその全体像をとらえることは不可能で、むしろ異文化コミュニケーションという、より大きな枠組みの中で通訳ボランティア活動をとらえる必要性を説くことで、通訳ボランティア活動の全体像を把握する努力を促したい。本題を先に急ぐ前に、以降、本論が土台としている異文化コミュニケーションそのものについて、異文化コミュニケーションで扱う異質性との関係においてしばらく考察しておきたい。

3. 異文化コミュニケーションの扱う異質性

異文化コミュニケーションという言葉は古めかしくなり、現代社会にそぐわないのではないかと指摘を聞く。この指摘に対して、グローバルコミュニケーション、多文化共生、多文化コミュニケーションなどの造語が発案されているものの、これらの新たな言葉にしても、そもそも何を意味するかという定義面での議論が十分になされているとは言い難く、これに対する反論としては、研究の最終目標が定義にあるのではなく、暫定的な定義を各研究者が行うことで研究を可能にし、先に進めることを優先すべきであるとの主張をあげることができよう。ただ、この主張にしても、結局のところ、総体的にどのような定義を各分野が支持するかに決着をつけることはできない。

(異文化) コミュニケーションとは何かを巡る論争は枚挙にいとまがなく今日に至っている。学問として成り立っているわけであるから、それなりの解釈上の共通性が認められてもおかしくはない一方で、定義を固めてしまうことにコミュニケーション研究は拒否反応を示す。なぜなら、個々の研究者の裁量によりコミュニケーションとは何たるものかを比較的的自由

に決められるからこそそのコミュニケーション研究であり、異文化コミュニケーションのあるべき姿が、研究の目的によって変えられることで、研究上の創造性が高まることはむしろ喜ばしい⁸⁾。

とはいうものの、せめてもの共通理解として異文化コミュニケーションの小分野を形成するのであれば、読者にとってもっとも納得しやすいのは、異文化コミュニケーションとしての翻訳・通訳ではないだろうか。最低でも二か国語を話す関係者を必要とする翻訳・通訳は、globalのもっとも典型的な例としての異文化コミュニケーションの高度な言語コミュニケーションが話題となる。他言語がglobalだとすると、必然的に自分に近い言語はlocalと形容することができ、自(または、母)語を活用してのコミュニケーション行動に関する考察を可能にしてくれる。

異文化コミュニケーションを巡る論争と上記で述べたのは、異文化とは何も異言語を扱わなくともいいのでは、との指摘を指してのことである。母語を同じくしても、異文化との遭遇は十分あり得、むしろ、共通の母語を持つ人々の間でのコミュニケーションの方が、現代社会において異文化と呼ぶべき要因を見つけ出させてくれることが多々ある。その典型例がLGBT(レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスセクシュアルの頭文字)概念の登場である。見かけは男性でも心は女性、その逆に、見かけは女性でも心は男性ならまだしも、近年では、既存のジェンダー枠を飛び越える自己アイデンティティが存在する。

異文化コミュニケーションは何も異言語だけを扱うものではなく、社会における多様性を認めるため、異質性を把握し、理解しようとするためにある。また、この動きが進めば、つまり、国内の異文化を扱おうとすると、極端に身近な存在に対してか、あるいは身近とは限らないものの極めて異質な存在を話題にとりあげがちになる。異文化コミュニケーションではマイノリティをとりあげるべきだとの提言があり、マイノリティをその視座にテーマを探せば、何も海外に研究の場を求めずとも観察が可能になるので、異文化コミュニケーション研究の場が広がると予想される一方で、誰をマイノリティとするかの疑問への納得いく解答が見出せないうちは、少なくとも筆者はマイノリティという言葉をもって異文化とするのは違和感

を覚える⁹⁾。

異文化コミュニケーションに過剰なまでの異質性を求めず、理論だけでなく、実践面での考察をも可能にしてくれる翻訳・通訳の分野は、ボランティアとの関連で考えると最適な小分野であると結論付けることができる。

4. 異文化コミュニケーションとしての翻訳・通訳

少なくとも日本の学問界で翻訳・通訳が学問的に成立したのは、先達らの長い功績の末のここ10年強の活動の賜物である¹⁰⁾。それ以前に翻訳・通訳は異文化コミュニケーション学やコミュニケーション学の傘下学問であったとしても過言にはあたらない。国際基督教大学で教鞭をとり初期の通訳学の基礎を築いた斎藤美津子氏は、コミュニケーション学を専攻していたことがこの一つの証左となる。また、のちに日本通訳翻訳学会に発展していった学会の立ち上げに参画していた鳥飼玖美子氏は、研究科に異文化コミュニケーションの名称を用いた立教大学にて教鞭をとっていた。近年では通訳翻訳学として独立するに至った分野も、これまでの背景では、主にコミュニケーション学や異文化コミュニケーション学の力を借りていたことが理解できる。

異文化コミュニケーション学は実学に位置づけられないが、日本の学問界に根付く歴史的背景から、語学をはじめとする英語学習との関連科目として扱われることがあった¹¹⁾。この間違った認識に対して、異文化コミュニケーションは英会話ではないと主張する研究者も多く存在した。おそらく、翻訳通訳学が確立する契機としての場をコミュニケーションや異文化コミュニケーションに見出していたのは、両学問分野の実学的な側面における共通性が寄与していたに違いない。

海外として一括りにすることは不可能だが、日本と比較するにあたって、より独立した学問体系として確立して長い間が経ったのも、翻訳では聖書の解釈など、また、通訳でも実務を研究に取り込むことに対する限られた抵抗感にあったと推察される。日本でも、教育特区などのように、教育面での特別な推進がなされたり、法科大学院や医学部の定員増など、

社会の需要に応じた対策がとられたりしてきた。今後は翻訳・通訳分野でも、実務面での多様化に伴って、それを推進する形で幾多の教育機関が台頭することが予想される。

そして究極の実務として、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックは、日本の政治・経済界のみならず、東日本大震災からの復興を支援する目的でも、また、社会的にも過去に開催された東京オリンピックの例に見ても明らかのように、インフラ整備など、社会の様々な側面での改革が期待され、すでに部分的には実質的な改善が行われている。

本特集で取り上げているスポーツ通訳ボランティアもその一例であり、ボランティア活動という社会的に意義の高い活動を担う人材育成のためのプログラム作りが試行錯誤の末、実施、拡大するに至っている。その概要は、前章の説明に譲るが、筆者が一講師として携わってきた経験から述べると、高校生、大学生、大学院生など、ともすると机上の学習で終わりがちな知識やスキルの習得度を自ら確認し、その重要性を実社会における活動を通して確認することができ、これ以上望め得ないほどの経験になることを確信している。

教室と現場、理論と実践という二律背反は、いまだに学問界と実務界を二分する障害になっており、異文化コミュニケーション学や通訳翻訳学の成り立ち期においても同じことが言えたのは前述の通りである。その反面、優れた理論は実践でも応用できるし、すぐれた実践を理論化すること、そして、優れた実践は優れた理論に基づいているなど、プラクティスを論ずる意見もあるため、どちらが正しく、どちらが間違っていると一方的にいずれかを糾弾することはできない。立ち位置によって視点が変わるのは当然であり、机上の空論に終始しがちな高等教育機関側の立場からすると、通訳ボランティアとしての現場(実践)の経験は受講生にとって机上の学習には代えがたい経験をもたらしてくれる。

5. 待つことも活動のうち

教室内での学習と現場でのボランティア活動との最大の違いは何か。筆者が実社会での実務経験と、特に大学などで行われている授業との比較が

ら痛切に感じる最大の相違点は、待つことにある。授業では、学習効果を高めるため、常に何らかの活動が受講生に期待されている。たとえそれが講義であっても、である。講師の言っていることを受身的に聴き取るだけの講義でも、まずは講義に耳を傾け、その内容を理解し、情報をノートにとり、必要に応じて復習するなどのコンスタントな動きが求められる。より実践的なスキル養成講座などでは、グループワークを取り入れ、受け身のノートとりではなく、講座の受講生とのインターアクションを通して、互いに学び合う、より積極的でコンスタントな講座内活動が必要となる。

一方、実際の現場では四六時中稼働状態にある仕事は、工場のライン作業などの特殊な状況を除いて、長時間で続くものはあまりない。システムズエンジニアや翻訳者として働いたことがある筆者の限られた経験を踏まえても、プロジェクトの局面によって閑散期や繁盛期とも呼べる忙しさに違いはあれども、大学の授業のように90分間継続的に何かの作業が続くことはあまりない。もちろん、大学の授業にしても、90分間で常に何か作業をしなければならない状態はあまりないが、それでも、常に何か稼働していることが期待され、休憩時間は90分後でなければ得られないという状態で仕事をするのは、特殊な職種を除いてあまりない。人間はそれほど長い時間集中していられるわけではないため、工場ラインなどの短時間あたりの高い集中作業が求められる職種であったとしても、定期的な休憩が必要になってくる。

一般的な職種についての議論はさておき、ボランティア活動に関して、待つこととの関連で述べると、ボランティア活動ほど、待つことに対して寛容でなければならない活動もないと考えられる。なぜなら、ボランティア活動はあくまで脇役であり、主役は脇役としてのボランティアを必ずしも必要としないからである。つまり、たとえボランティア要員がいなくとも、主となる競技は開催されるのであって、ボランティア要員の参加が想定される大会競技などないからだ。

大会側が競技開催に必要とされる人員を確保するのは、あくまで競技に直接関係する作業であって、学生が参加できるようなボランティア活動で

は作業内容が限られ、競技進行を左右するような役割を与えられることなど想像できない。大会開催全体からすれば、学生に支援を求めるような作業内容は、多少極端な物の言い方になるが、想定外の作業支援も含まれることが前提とされ、この点を踏まえて考えると、その想定外の事態が起こるまで、ボランティア活動は待ちの状態が続くことも可能性としてあり得るだろう。

ここで重要なのは、待つということもボランティア活動の重要な要件の一つであり、待つことを通して、周りの状況を観察・理解し、その場で何が求められているのかを判断・提言し、実行するという一連の作業を自らの意思で行うことである。一人ひとりがこのような待つことの重要性を認識してもらうために、筆者が担当する講座では「待つこともボランティア活動の一つ」と強調している¹²⁾。

6. スポーツ通訳への参加事例

ボランティア通訳としての役割をこれまで論じてきたが、抽象的な議論で終わらせないために、ボランティア通訳とは何かを示す具体的な事例を以降あげていく。いずれも、神田外語大学をはじめ、現在では日本全国の7外国語大学が参加するスポーツ通訳ボランティアとして派遣された学生から聞き取り調査した結果である。対象となる学生は、筆者が担当する授業科目の履修者の中から、スポーツ通訳ボランティアの参加者を作為的に選び、半構造化技法によるインフォーマルな面談を行った。面談内容はメモに取り、スポーツ通訳ボランティアを行った参加者が具体的にどのような作業を行ったかの事例として収集した。インタビュー調査の結果、スポーツ通訳の直接的以外の間接的な目的を説明するような事例がいくつか見つかった。以下、それをエピソード形式にて報告していく¹³⁾。

エピソード1: 選手に対するサービス

ある団体競技のスポーツ通訳ボランティアに何名かで派遣された。特に、作業内容は指示されず、初めのうちは何もすることがなかったので、仕方なく選手の練習中に球拾いをしていた。そのうち選手と話をするよう

になり、球拾いだけでは申し訳ないので、ボランティアとして何かできないかを選手に直接訊いてみることになった。すると、休みの日に遊園地に連れて行ってほしいとのリクエストを選手らからもらったので、競技会場から近い遊園地に、選手の休日を利用して遊びに行った。

エピソード2: 選手の家族に対するサービス

ある団体競技にスポーツ通訳ボランティアとして派遣された。スポーツ会場にての選手の支援かと思いきや、選手に同行する家族が、とあるホテルで華道教室に参加するので同行してほしいとのことだった。部屋に行ってみると、準備がしっかりとなされ、しかも、華道の先生は英語が話せたので、通訳の作業はほとんどせず、家族と一緒に華道教室に参加した。その後、お昼や夕食を共にして、結局その日は一日中家族に同行するだけだった。

エピソード3: スポーツ団体へのサービス

その日は、何度かスポーツ通訳として参加した中で、一番、競技会場に近いところでの作業だった。トライアスロン競技で、競技終了直後の選手に声をかけ、ドーピングのランダム検査に参加してもらうため、検査場所まで連れて行く作業。持久力が求められる中でも最も辛い競技で、競技終了直後の選手に声をかけてはみたものの、実際にドーピング検査を受けてくれた人は少なかった。たとえ、受けてくれても、誰も良い顔はせず、とても辛い一日となった。

エピソードの考察

いずれの事例も、スポーツ通訳ボランティアとしての、本競技開催実現への間接的な目的を達成するためのものであり、直接的な目的と思われがちだが、スポーツ競技での勝利に結びつくための支援にはほど遠いものばかりであることがわかる。とは言え、スポーツ競技を開催するというイベント全体として、ボランティア通訳が必要な役割を担っていることだけは確かである。必要か必要でないかの切り分けが微妙になるが、選手にとって

は、スポーツだけではなく、気分転換を図る重要な時を、日本人大学生と共に過ごすという貴重な経験となったことが、エピソード1から伝わってくる。

異文化にいと、母国ではリラクゼーションだったものが、むしろストレスに感じられることがある。これとの関連で、むしろ些細なものほど、その人にとってのストレスにつながり、細々とした些細なものが管理できないがために、異文化衝突や健康被害に発展するケースがある¹⁴⁾。スポーツ競技で本領を発揮するだけではなく、プライベートな部分でのリラクゼーションが充実すれば、総合的にみて充実したスポーツ競技イベントへの参加が期待できるであろう。

エピソード2では、選手に同行する家族の体験が描かれている。選手に同行する家族の役割は重要で、体調管理であったり、栄養管理、時には、精神的な支援を家族が提供したりする場合も十分考えられる。そのためには、家族こそが有意義な時間を過ごす必要があり、日本文化を学ぶことは即座に思いつくおもてなしとなる。家族にとって初めての日本文化ではあるが、実は、日本人大学生も華道を経験したことがないという事実を知ること、若者の実態を把握し、直接語り合う機会を持てたことは、その時間を、そしてその後の滞在を何倍にも楽しいものにしたであろう。

個人競技の場合、選手の家族が競技イベントに同行するケースはあるだろう。しかし、団体競技の場合には、全選手の家族が同行するケースはあまりみられないのではないか。特に、企業人の単身赴任が頻繁にみられる日本人選手にはそれが強く言え、これは裏を返せば、日本でのスポーツ競技イベント運営には、団体競技といえども、同行する選手の家族へのおもてなしを忘れてはならないとの示唆として受け止めるべきである。

エピソード1、2でとりあげた楽しい仕事だけではなく、エピソード3のように、スポーツ通訳者にとっては最大のサービス被提供者である選手と直接しかも競技会場にてコミュニケーションがとれる場では、選手の心をまるで傷つけるような作業を依頼されることすらある。ボランティアにとっては最も心が痛む瞬間である一方で、スポーツイベントとしては、近年稀にないほどの重要なドーピング対策を確実に履行するための役割を

担っている。実務とは時として相手との関係性にゆがみを生じさせるインパクトを伴うもので、教室内での活動にはなかなか見られないものである。

スポーツ通訳の実態のいくつかを、派遣されたボランティア学生の声を通して知ることができた。楽しいエピソード1、2はさておき、最後のエピソード3のように、精神的な苦痛を伴うボランティア活動には事前に目を向けておく必要がある。以降、ボランティア通訳の範囲を超え、授業の一環として実プロジェクトに参加する際の注意点をまとめておきたい。

7. 産学連携の課題 実プロジェクト参加を通して

筆者はこれまで教室内に様々な実プロジェクトを持ち込むことを念頭に置いて授業計画を立ててきた。授業の履修生に実プロジェクトに取り組んでもらう、ということである。前務校でプロジェクトをベースにした授業計画や実施にはさほどの抵抗を感じずに授業を運営する、ある程度の経験に基づいている。本学に移籍後も、本学の母体である神田外語グループ主催の英語プレゼンテーションコンテスト¹⁵⁾をはじめ、技能五輪¹⁶⁾向けの翻訳プロジェクトなどを授業内で継続的に実施している。

授業で実プロジェクトに取り組んでもらうたびに感じるのは、実プロジェクトがいかに教室内のコミュニケーション、中でもグループ活動やメンバーの人間関係に変化をもたらすコミュニケーション・リスクを発生させやすいかに対する認識である。実プロジェクトは、授業内容と授業コミュニケーションへ強い影響を与える。教室内で完結する作業に慣れている学生にとって、実プロジェクトは好ましくない悪影響をもたらしがちで、最悪のケースでは、受講生が授業の履修を断念したり、何も言わずに去っていったりすることも過去にはあった。そのたびに、担当教員としては、これが現実だ、との言い逃れめいた説明で終わってしまうのが往々にしてあったのだが、それを言い続けるのも歯がゆい思いがして、今後は、実プロジェクトが教室内へもたらすリスクをも想定した、実プロジェクト運営にあたりたいと思いつつも、なかなかそれができずに今日に至っている。

広義の観点から、産学連携の課題として以下まとめておきたい。まず、経営学部や商学部、経済学部など、ビジネスに直結した学部生が学びの場として産学共同プロジェクトに参加するのならまだしも、ビジネスと直接関係しない学部生がビジネスプロジェクトに参加する意義はそもそもあるのか。たとえ学部生がいつの日か就活に従事することになろうとも、ビジネスに直接関係しない授業で実プロジェクトに取り組んでもらうには、授業内容との齟齬があり、実プロジェクトを扱う授業科目の選定には理由付けが必要となる。前務校ではまさにビジネスプロジェクトに取り組むことが目的の授業科目が用意されていたのでさしたる問題はなかったが、どこでもそれが可能になるとは限らない。

次なる課題として、スケジュールの問題をあげておきたい。ビジネスに限らず、実プロジェクトは、たとえそれが学生向けのものであっても、大学の学年暦や授業内容やスケジュールを考慮した上で予定が組まれているわけではない。大学の授業には半期完結型、通年ものが大別され、用意されている。ゼミを重視する大学などは、1年次から卒業までゼミ生が共に学び合うところさえある。ただ、大学の授業の多くは、受講生が知り合う期間として春・秋の14～15週間であり、このタイミングに合わせた形でプロジェクト計画が立てられないと授業計画上とても厳しくなる。

たとえば、プロジェクトへの事前応募の開始が春学期中だとすると、授業の履修生に応募させたはいいが、春学期が終わるとグループ解散では授業内プロジェクトとして完結しない。また、秋に本格的な応募がはじまるのだとしても、秋学期の開始から数週間でグループを組ませ、準備させ、応募するといった、履修生側からすると、短期間で相当のストレスを感じ準備しなければいけないので、何のための授業かわからなくなることさえある。たとえ応募が採用されたとしても、春学期のうちから準備をはじめた他大学のグループや自主的に参加しているグループと競争しなければならず、常に不利な状況に立たせられる。

プロジェクトの多くは、プロジェクトを主催・協賛する企業の製品サービスを具体的に販促させるものであり、中には、実際に販促を行っての結果を元にコンペさせるような企画内容がある。これなどは、体の良い、学

生の無償労働をうまく利用した販促ともとられかねず、プロジェクトを企画する企業の倫理面が疑わしくなってしまう。

最後の課題として、翻訳・通訳の世界を自己と他者との関係性から考えると、極めて他者性の高いコミュニケーションが求められるのが翻訳・通訳行為である。翻訳・通訳を導管モデル (conduit model) で表してみると、まるで翻訳者・通訳者という導管を通り、言語変換装置というフィルターに他者の発話がかけられる過程とみなすことができる¹⁷⁾。また、ボランティアとの関連で考えると、ある程度の受け身的な対応も時には求められるだろう。ボランティアが積極的過ぎて、本来の競技に悪影響を与えてしまっては元も子もない。翻訳・通訳、そしてボランティアがともに他者性を中心に考える行為であるため、必然的に受け身的な行動のとり方になってしまうのは深く頷くことができる。

スポーツという文脈がもたらす、翻訳・通訳、ボランティアへの影響とはいかなるものであろうか。スポーツとは単純に考えて、ある一定のルールに従って勝ち負けを決める肉体的・精神的競技であり、重要な鍵概念として勝敗は欠かすことができない。スポーツのイベントへ参加する選手にとって、記録更新という純粋な目的だけではなく、相手に勝利するという究極の目的達成が求められる。そのため日頃からの練習や肉体強化、精神面での鍛錬を疎かにすることはできず、苦難のトレーニングを乗り越えてイベント参加のための機会を得ている。

スポーツ通訳の最大の目的は、各選手が各々の目的を達成するための支援を施すことにあり、選手または当該スポーツ団体がスポーツ通訳に求めていることとは、必ずしも一致しないだろう。つまり、前者を直接的目的とすれば、後者の目的の1つとして、選手・選手の家族・スポーツや関係団体という当事者すべてに対して、スポーツイベントに成功をもたらすための支援を施すことという、さらに広範囲に支援範囲を拡大させる必要がある。

翻訳・通訳の導管モデルでは見逃してしまうであろう、スポーツ通訳ボランティアの役割がむしろ大切になる事例が多々あげられる。そもそも、導管モデルをふさわしくないとして否定する見方もある。通訳者にさらな

る役割を期待し、具体的には、単なる黒子ではなく、当事者を仲介する仲介者としての役割が求められることがある。この点を踏まえて考えると、スポーツ通訳ボランティアに至っては、むしろ、仲介者の役割を期待する異文化コミュニケーションという冠をかぶらせた方が妥当となろう。当事者間のコミュニケーションが成立するためには、表面的な言語変換だけを機械的に行っている以上のことが期待される場合が多々見られる¹⁸⁾。

産学連携面で実プロジェクトに参加させる上での課題との関連で、授業期間中にプロジェクトを終えたいがために、どうしても作業範囲を限定する必要が生じるのだが、プロジェクトを依頼する企業側からすれば、長い目で見て学生らにプロジェクトに参加してほしいと望んでいる。提案型と実施型というようにプロジェクトは大別でき、学生らの支援を欲しているものは前者の提案型であることが多々あるが、それにしても、学生らが直接プロジェクトを推進するような形で実施し、フォローしてくれば企業側にとってすれば万々歳であろう。単なる導管として言われたことを右から左へ移すだけの通訳モデルからすれば、視点の転換には作業範囲が特定できないという条件が入り込んできてしまう。

このような視点の転換は、セミナーへの参加から効果的に促されることは言うまでもない。しかし、セミナーへの参加からのみにより促されるだけでは不十分であろう。なぜなら、本番では予期せぬ事態がスポーツ通訳ボランティアを待ち構えていることもある。臨機応変な対応が求められる。このような要素を、異文化コミュニケーションで扱っている概念の一言で表すとすれば、「異文化適応」がもっとも相似するに違いない¹⁹⁾。ただ、異文化コミュニケーションの中では、現在でもその価値は認められる一方で、かなり使い古された概念であるため、本論の中で適応の言葉をあえて用いてこなかった。その最大の理由は、適応は他者があってこそその他者中心の発想をしているように思える一方、最終的には自己がどのように他者に対応していくかが問われていて、かつ受け身的な印象を与えるからである。

グローバル人材育成との関連で適応にとって代わるべき概念は、発想の転換ではないだろうか。能動態、受動態しかないと思っていたところへ、

中動態を持ち込むこと、と換言できよう。ボランティアに関しては、無償ではなく、自発性へ。通訳に関しては、黒子から仲介者へ。スポーツに関しては、競技から競技イベントへという流れで、個々の競技のことだけを考えるのではなく、スポーツイベントをマネージしていくことを最終目的にスポーツボランティア自体が考察されるべき時が来ている。個々の通訳ボランティアがこれを踏み台に一步高みに上がれば、イベント全体としてかなりの成果が期待できるであろう。

今後の課題

2017年夏、第一回高校生向けセミナー「通訳ボランティア講座」が5都市にて開催された。同年で5回目を数える大学生向けの講座とは異なり、講座の時間も短めではあったが、筆者が担当した講座に限って言えば、質の高い受講生によるグループワークが中心のメリハリの利いた時間となり、印象に残る講座となった。

本論の流れの中で考察してきた発想の転換とはあくまで、ある程度社会的な経験を経た上で期待すべきものなので、今後、ボランティア育成の対象が低年齢化する可能性が潜在的に認められ、具体的に言えば、高校生なども参加する可能性があることを前提に、活動の場としてボランティアをどのようにとらえるかの議論は今後の課題となる。

昨今では、職場体験や職場見学と称する参加型プログラムが小学校の頃から導入されるようにはなっているものの、この種のプログラムでは、教室外に出る際にできるだけリスクを回避した形での運営がなされている。訪問する職場は、児童生徒の保護者が関係している職場などに限定され、それ以外であっても、児童生徒の体験学習を尊重する職場による協力が欠かせない。

一方、本論でとりあげた通訳ボランティアのケースでは、ボランティアの対象となる人々が、ボランティアにとっては未知の人々であり、不特定多数という状況もかなり想定される。ある程度、現場に近いところでボランティア活動をしてもらうには、それ相応のリスク回避策があらかじめ講じられている必要がある。そのためには、前述の通り、ボランティア要員

を育成するだけではなく、いかにボランティア要員を組織化し、現場レベルで(言葉の使い方はやや極端に聞こえるが)監視体制の元、有意義なボランティア活動に安心して従事してもらえるかを検討するボランティア・リーダーシップの育成が強く求められており、そのための議論・検討を急ぐべきである²⁰⁾。

注

- 1) 先行研究を調査してみると、通訳教育、オリンピック教育、ボランティア教育などにおいて遡及的に教育実践効果を考察するものがみられる。北島(2016)、大野・栗原(2015)、稲生ほか(2010)など。
- 2) 『現代思想』2017年8月号は『『コミュ障』の時代』と題した特集を組み、コミュニケーションとは何かの問題に取り組んでいる。グローバル人材とコミュニケーション能力との議論については武田(2017)が論じている。
- 3) 筆者が前務校の立教大学経営学部国際経営学科でBBP(Bilingual Business Project)を担当していたときに、授業内課題の一環として参加した大学生向けビジネスプロジェクトをSIFE(Student in Free Enterprise)が運営していたもの。現在では、団体の名称がenactusに変更となっている。<http://enactus.org/>
- 4) 別の解釈として「グローバル化」が思い浮かぶかもしれないが、ここでは論じないこととする。グローバル化、グローバル化については塩原(2017)を参照のこと。
- 5) 中田・市川(2009)は、「利己性」、「利他性」という併存可能な特徴で語学ボランティアがボランティア活動に参加する目的をまとめており、「利己」でもあり、「利他」でもある点から、まさに中動の概念と共通するものがある。
- 6) 能動態、受動態の2つしか学校文法では習わないが、「中動態」なる態も存在し、そのなんたるかを哲学的に検証した國分功一郎(2017)『中動態の世界 意思と責任の考古学』(医学書院)が小林秀雄賞を受賞した。
- 7) Merriam-Webster オンライン辞書では、volunteerの形容詞形voluntaryの意味として、proceeding from the will or from one's own choice or consentとある。<https://www.merriam-webster.com/dictionary/voluntarily> 2017年10月17日7時26分閲覧。
- 8) 用語をとらえる上でのあいまいさは学問上の創造性につながるとして歓迎する声もある。“..... While we appreciate the need for policy to be based on specific definitions, we also note the importance, in academic research, of ambiguity and definitional expansiveness. Key terms in our field — not least of which is *communication* itself — continue to be broadly understood, and as the articles in this issue demonstrate, from such ambiguity comes creativity, investigation,

critique, and insight.” (Ganesh & Holmes, 2011, p. 83)

- 9) 2017年度異文化コミュニケーション学会の年次大会では、「白人と人種のアイデンティティ発達理論：特権の心理学の最新の研究事例」と題して、ジャネット・E・ヘルムズ氏による基調講演が行われた。喫緊の課題として女性の社会進出を訴えるヘルムズ氏の言葉の端々に“Dominance”（支配、優勢）のことが使われたことが筆者の印象として強く残る。
- 10) 2017年において日本通訳翻訳学会は第18回の年次大会を迎える。
- 11) 異文化コミュニケーション理論構築でよく知られる石井敏獨協大学名誉教授が「異文化コミュニケーションを教え始めた頃は、英会話とよく勘違いされた」と生前、よく嘆いていたことを筆者は思い出す。
- 12) この点に関連して、やや余談になるが、東京オリンピック・パラリンピックでは、人気の高さも手伝ってボランティア活動そのものの供給が十分になることが予想されているが、はたしてボランティア活動を効率的に運営できるかが大会側には問われている。ただし、ご承知の通り、大会運営側をはじめ、関係機関は本大会の競技開催という主目的を達成するだけでも手一杯の状態、ボランティア活動の草の根を育成する目的で開催されてきた「通訳ボランティア育成セミナー」が、さらにボランティア活動を広義でとらえ、ボランティア活動全般をどのように運営していくか、そして、実際に運営するかの「ボランティア・リーダーシップ」の育成に目を向けるべき時が来ているのではないだろうか。大きな目でボランティア活動を見た場合の課題を指摘しておきたい。
- 13) プライバシー保護のため、参加者の氏名は公表しない。
- 14) このような些細な失敗をクリティカル・インシデントとして収集したものにKushner & Brislin (1996)がある。
- 15) 神田外語グループ、読売新聞社共催の全国大学生向け英語プレゼンテーションコンテスト (<http://www.kandagaigo.ac.jp/contest/>)。2017年には第6回を数え、全国規模の大会となり、発表者のレベルは上がる一方であるとの印象を受ける。
- 16) 中央職業能力開発協会主催の青年技能者の技術レベル向上を目的とした全国大会 (<http://www.javada.or.jp/jigyoin/gino/zenkoku/>)。2017年には第55回大会となる。
- 17) コミュニケーション理論の創世記に採用されたShannon (1948)の情報通信モデル、それを人間コミュニケーションに応用したBerlo (1960)のSRCMモデルがよく知られている。
- 18) AI通訳アプリが普及すれば、そもそも外国語学習を必要としない、簡単な通訳は誰でもができてしまう時代が到来するだろう。
- 19) 1980～90年代にオクラホマ大学のY. Y. Kimが広めた考え方で、現在では古典的な異文化コミュニケーション理論として知られるようになっている。

- 20) 出口(2017)は、実践の共同体の枠組みを用い、国際ボランティアのリーダーを務める日本、韓国、ロシア人間の会議におけるディスコース分析を時系列的に行い、リーダーシップ、第二言語習得の両面からリーダーがとるべき役割を学び取っているプロセスを詳述している。国際ボランティア、リーダーの両側面に関連している研究として大いに参考になる。

参考文献

- 稲生衣代・河原清志・溝口良子・中村幸子・西村友美・関口智子・新崎隆子・田中深雪(2010)「日本における通訳教育の課題と展望: 日本通訳翻訳学会・通訳教育分科会 2009-2010 年度プロジェクトより」『翻訳研究への招待』日本通訳翻訳学会、10号、259-278頁
- 大野直子・栗原朋之(2015)「オリンピックの通訳について: 文献考察とインタビュー調査より」『教育研究』国際基督教大学、129-136頁
- 北島信哉(2016)「東京五輪・パラリンピックに向けた大学連携事業に関する事例研究」『スポーツ産業学研究』26巻、1号、183-189頁
- 國分功一郎(2017)『中動態の世界 意思と責任の考古学』医学書院
- 塩原良和(2017)『分断と対話の社会学: グローバル社会を生きるための想像力』慶応義塾大学出版会
- 武田砂鉄(2017)「コミュニケーションを『能力』で問うな」『現代思想』8月号、70-77頁
- 出口朋美(2017)「国際ボランティア参加者の学びのプロセス: 相互作用と活動への参加モードの変化から」『異文化コミュニケーション研究』20号、103-120頁
- 中田和子・市川謙三(2009)「ボランティアにおける『利己性』と『利他性』: 語学ボランティアのケーススタディーを通して」『地域総合研究』、松本大学地域総合研究センター、109-123頁
- Berlo, D. K. (1960). *The Process of Communication*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Kushner, K., & Brislin, R. W. (1995). *Intercultural Interactions: A Practical Guide* (2nd ed.), CA, Thousand Oaks: SAGE Publications.
- Ganesh, S., & Holmes, P. (2011). Positioning intercultural dialogue: Theories, pragmatics, and an agenda. *Journal of International and Intercultural Communication*, 4(2), pp. 81-86.
- Shannon, C. E. (1948). A mathematical theory of communication, *The Bell System Technical Journal*, vol. 27, pp. 379-423.